

# 11月2日 死者の日

哀 3:17～26    IIコリ 4:14～5:1    ヨハ 6:37～40

## 1. 哀

哀歌は、イスラエル民族の歴史における最大の悲劇であった紀元前 587 年のエルサレム陥落とユダ王国滅亡に対する嘆きの歌を集めたもので、恐らく後のユダヤ教団の祭儀で歌われたものと考えられています。第三章は個人的な嘆きの形で歌っている部分ですが、それは近代人が理解するような意味での個人ではなくて、ユダヤ教団という共同体と固く結びついた集合的な個人の嘆き、いわばユダヤ民族の嘆きの歌なのです。

v.17-18 「わたしの魂は平和を失い、幸福を忘れた。わたしは言う。“わたしの生きる力は絶えた。ただ主を待ち望もう” と。」

捕囚期のユダヤ民族が、国家の滅亡によって自らの宗教を失うことなく、最大の悲劇の中でなおイスラエルの神に期待し続けたその信仰は、空しいものではありませんでした。

v.24 「わたしは主を待ち望む。」

そのように、私たちの主イエス・キリストは時満ちて、「エルサレムの救いを待ち望んでいる人々」(ルカ 2:38) のところに来てくださいました。

## 2. ヨハ

v.38-39 「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」

死者の日が主日と重なる年は珍しいのですが、この日の朗読配分は葬儀のミサのためのものと同様なので、多くの信者にとってはむしろ聞き慣れた聖書朗読であります。

私たちが信仰宣言で唱える「からだの復活、永遠のいのち(死者のよみがえりと、来世の生命)」は、すべてのキリスト者の希望であり続けて来ました。キリスト信者にとって死とは、復活と永遠の命への過越であることを、教会は葬儀や命日祭のミサを通して明確に表現して来たからです。

主イエス・キリストが信じる人々を神の国に復活させてくださるという希望は、「わたしの父の御心」(v.40) であって、それは御子の血によって贖われ救われた教会という群れに関わる事柄であります。それは切り離された個人ではなくて、キリストの体の部分である教会のすべての信者のための「わたしの父の御心」なのです。それは「わたしに与えてくださった人を一人も失わないで」(v.39)、「子を見て信じる者が皆」(v.40) と述べられている通りです。

教会が死者の日を記念し、死んだ信者のための葬儀を大切にするのは、それを決して単に個人的な事

柄としてではなくて、教会共同体に関わる事柄であると理解しているからです。

### 3.

カトリック教会の葬儀のための儀式書は、その緒言の中で次のように述べています。

1. 教会は葬儀において、何よりも復活信仰を表明し、キリストによって死者を神の御手にゆだねる。死からのちへと過ぎ越されたキリストによって贖われたことを信じる教会は、葬儀において神の偉大な業を記念し、感謝をささげる。それは、死んで復活されたキリストに洗礼によって結ばれた信者が、……キリストの再臨と死者の復活を待ち望むよう祈るためである。

2. 教会の葬儀は、死者のために祈ることのみを目的としているのではない。……洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることが出来るという復活への信仰を新たにし、宣言する場でもある。

### 4. II コリ

v.14 「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」

使徒パウロが「わたしたち」と語ったとき、それは直接的には自分とコリントにある神の(諸)教会を指して述べたのですが、将来的には使徒たちと全世界の教会、使徒たちの後継者である司教たちと代々の時代の教会をも指していました。信者一人一人の生涯にもいろいろ変遷があるように、歴史の教会にも時代を経て多くの変化があります。その教会の「外なる人」は衰えることがあっても、「内なる人」は日々新たにされ、やがて神の国を受け継ぐ民として復活するのです。この希望こそが、21世紀の教会の最初の世代である私たちの支えに他なりません。

v.18 「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。」

アーメン、ハレルヤ。

## 11月9日 ラテラン教会の献堂

エゼ 47:1～12    Iコリ 3:9～17    ヨハ 2:13～22

### 1. エゼ

預言者エゼキエルは、南王国ユダがバビロンの王に滅ぼされ、エルサレムが破壊された後 14 年目に、神の幻によって捕囚の地からイスラエルの地に伴われ、そこで将来エルサレムに再建される神殿とそこで  
の祭儀の詳細を示されました。その幻の描写は黙示文学的であり、当時の絶望に沈んでいたイスラエルの  
民の中に希望の息吹を呼び起こすことを目的として、書き記されたものと思われます。

「人の子よ、あなたはイスラエルの家にこの神殿を示しなさい。……彼らに……、そのすべての計  
画と掟に従って施工させなさい。」(43:10-11)

神殿の再建は、単に建物の施工だけではなくて、そこで行われる祭儀と祭司の務めの、さらにその祭儀  
を支えるイスラエルの民の再建でありました。かつて一度神殿を去られた神(10:18)が、再び神殿に帰り  
(43:4)、主の栄光が満ちて、命の水が大河となって流れ出して死海にまで達する様を、エゼキエルは詳細に  
書き残しています。その預言の目指すものは神の民イスラエルの再建でありました。

### 2. ヨハ

私たちは教会共同体と御聖堂の建物とを区別しないで、普段“教会”と呼んでいます。しかし神殿とい  
う言葉も教会という言葉も、新約聖書では建物のことではなくて神の民の共同体をさして用いられていま  
す。

キリストの体である教会(Iコリ 12:27)とは、建物ではなくて共同体のことであるという初代教会の主張が、  
主御自身に起源すると理解されていたことを、今朝のテキストは示しています。

v.21 「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。」

4世紀の初めに皇帝コンスタンティヌスによって建てられ、使徒ペトロの墓が移されたラテラン教会の献  
堂の祝日は、全世界のキリスト者の群れの一致の象徴としての役割を果たすために、16世紀以来守られて  
来たと言われています。歴史的には、確固としたローマ教皇の地位が諸教会に認められるようになって来  
たことと関係して、この大聖堂の図面がロマネスク時代のヨーロッパ各地の教会建築の模範とされたため  
に、“すべての教会堂の母”としての“建物”を記念する祝日と考えられることが多かったようですが、本  
来はむしろ“すべての教会共同体の母”として、ラテラン教会でミサをささげる会衆のことを想うことのほ  
うが、より大切でありましょう。

洗礼の秘跡によってキリストの体の一部となった私たちは、ラテラン教会でミサをささげる会衆と一つ  
であり、その祭壇と全世界の諸教会の祭壇とは同じキリストの祭壇なのです。

### 3. Iコリ

使徒パウロは教会共同体のことを説明するために、建物の比喩を用いました。

v.9 「あなたがたは神の畑、神の建物なのです。」

この比喩では、切り離された個人ではなくて、共にミサをささげる共同体が取り上げられています。使徒たちの目標は、神の神殿であるキリストの体を造り上げて行くことであり、その土台となる福音の宣教によって、他の人々もこの働きに参加出来るようにすることでした。

現代のキリスト者である私たちは、久しく信仰を個人の心の中の事柄と考えて、共同体の形成に関わるような理解の仕方を知らずに歩んで来ました。一方では神殿や教会という言葉在建物と同一視し、他方では切り離された個人個人の尊厳を指す言葉として神の神殿という表現を理解して来ました。

v.17 「神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。」

これは共にミサをささげている共同体のことであって、切り離された個人のことではないのです。そのような共同体としての教会の再建への招きが、21世紀のキリスト者である私たちに向かって呼びかけられています。それは主日ごとに朗読される聖書を通して、確かに語られているのです。そしてそれはとりもなおさず、「教会の絶え間ない確固たる伝承」(ミサ典礼書の総則 前文 1)に基づく、私たちのミサの再建への呼びかけなのです。                      アーメン、ハレルヤ。

## 11月16日 年間第33主日

ダニ 12:1~3    ヘブ 10:11~18    マコ 13:24~32

### 1. ダニ

教会が使徒継承によって受け継いで来た信仰と、一般信者のキリスト教理解との間の隔たりは、20世紀末になって遂に非常に大きなものになってしまいました。過去数百年という単位の永い時代が、徐々にこの隔りを大きくして来たのだと言うことが出来ます。

私たちは皆その時代の子であって、神が歴史の中でお進めになっている神の国の業、すなわち救済史の進行に目を向けることのない生き方を、当たり前のように生きて来ました。しかし教会が受け継いで来た使徒的信仰を、私たちが自らの信仰として受け入れていないという苦難の時代は、いよいよ頂点に達して、遂には終わる日が来ることを、私たちはこの典礼暦の最後の期節の聖書の朗読を通して今年も聞かされます。

アンティオコス・エピファネスの死とそれに続く苦難(1 マカ 6 章以下)の後に来る、ダニエル書が語る神の王国の預言は、聖書の他の箇所と共に、キリストの再臨の日に実現する神の国を指し示す神のことばとして、キリスト教会によって再解釈されて、主日の朗読配分の中に加えられて来ました。

v.2 「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。」

信仰者一人一人の復活を約束するこの表現と、その日に受ける永遠の命への明確な言及は、いわゆる旧約聖書 39 巻の中ではこれが唯一のものですが、続編とそれを背景として登場した初代教会の思想の中で決定的に重要な位置を持つようになりました。それは教会が使徒継承によって受け継いで来た信仰の、不可欠の要素であります。

多くの者の復活の日に、その中で「目覚めた人々」「多くの者の救いとなった人々」(v.3/11:33 参照) が特別に輝くと述べられていることに、私たちは勇気づけられます。世俗化の頂点に達した 21 世紀初頭のキリスト教会の中で、聖書を朗読し、そこで語られる神のことばに耳を傾けるようにと人々を招いた奉仕者たちを、神は復活の日に輝かせてくださるのです。

### 2. マコ

w.26-27 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人々を四方から呼び集める。」

その「呼び集め」られる人々の中に、確かに自分も含まれることを信じる信仰が、代々の時代のキリスト者を支えて来ました。教会がミサを大切に、信者一人一人がときには命を賭けてでもこれを守って来た歴史は、このキリストの福音への信仰の歴史であります。ミサをささげるために集まる会衆は、共に神の国へと復活することを期待する民でありますから、交わりの儀の中で声を合わせて、「わたしたちの罪ではな

「教会の信仰を顧み、おことばの通り教会に平和と一致をお与えください」と祈ります。

その日その時がいつであるのか、私たちは誰も知りません。しかしそれは、その日の到来が私たちの福音の目標であることを忘れてもよいという意味ではありません。ことばの典礼で聖書朗読台から私たちに語っておられるキリストと、感謝の典礼で祭壇の上から御自身のからだを血を与えてくださるキリストとは、同一の方であります。私たち信者はミサの中でキリストの聖体のいけにえに与かりますが、また神のことばの食卓の豊かな富にも与かるようにと招かれています。そしてその聖書の朗読を通して、今朝私たちは神のことばを聞いています。

v.31 「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

### 3. ヘブ

キリストの福音は完成されたものであって、これに私たちが何かを付け加えたり、その一部を修正したりしなければ今の時代に対応出来ないというようなものではありません。

既に久しく人々は、福音を教会が使徒継承によって受け継いで来たそのままに受け入れるということ、時代錯誤のように思い込んで、真面目に聖伝と聖書が伝えるものを学ぼうとしませんでした。そのような使徒継承への漠然とした不信が、結果として人々の福音への無知を生み、聖書から「主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇き」(アモ 8:11) が、現代のキリスト教世界全体を覆うこととなりました。

そのあるがままの状態の全世界のカトリック教会のミサで、今朝も同じ聖書の朗読が行われています。

vv.12-14 「しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠の神の右の座に着き、その後は、敵どもが御自分の足台となってしまうまで、待ち続けておられるのです。なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。」

私たち一同は終わりの日に、このキリストの“裁きの座”の前に立つのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 11月23日 王であるキリスト

ダニ 7:13~14 黙 1:5~8 ヨハ 18:33~37

### 1. ヨハ

v.33 「そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、“お前がユダヤ人の王なのか”と言った。」

出来事の経過に関しては殆どマルコ福音書の報告に何も加えることをしていないにもかかわらず、このヨハネ福音書の語り口の背景には、一世紀末から二世紀初めにかけてのキリスト教会の状況が反映しています。ピラトが不安気に尋ねたイエスへのこの問いかけは、恐らく当時のキリスト教を取り囲む異邦世界の問いかけでありました。ユダヤ人の王として処刑されたけれども、死人の中から復活したと宣べ伝えられているイエスは、その宣教によればすべての人の救い主であると言う。果たしてこのイエスは全世界の人々の王であるのか、それともユダヤ民族だけの王であるのだろうか。

現代はキリスト教が多くの宗教の中の一つの宗教として相対化されている時代です。多くのキリスト者たちが、主イエス・キリストが「王の王、主の主」(黙 17:14,19:16)であると告白することに、今や躊躇を覚えています。時代は変わったのでしょうか。いいえ、そう考えるのは正しくありません。ヨハネ福音書を始めとする新約聖書の各書は、いわば現代にも通じる宗教の相対化の風潮のただ中で、敢えて「王の王、主の主」であるイエス・キリストを宣教するために書かれ、用いられたというのが、より正しい判断なのです。

典礼暦の最後の主日は、王であるキリストの祭日であります。教会は終末の日に実現する神の国の王として、やがて再臨されるイエス・キリストを宣言する祭日を、あらゆる時代を通して頑に守り続けて来ました。

v.36 「イエスはお答えになった。“わたしの国は、この世には属していない。”」

救い主イエス・キリストは、この世の多くの王たちの中の一人の王ではありません。そうではなくて、生きている者と死んだ者を裁くために来られる神の国の王であります。全世界のすべての人々が、差し迫った神の怒り(マタ 3:7)を決して免れることが出来ないことを、今年も私たちは思い起こさねばなりません。そして、洗礼の秘跡によって永遠の命を受けた人々は、王であるキリストを仰ぎます。

### 2. 黙

私たちのミサの中で、聖書朗読台から御言葉を語り、祭壇の上から御自身のからだと血をお与えくださるキリストは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(v.8)であります。

v.7 「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。」

教会は神の国の相続人であって、その日には神はイエスと共に私たちをも復活させ、御前に立たせてくださること(II コリ 4:14)を信じています。キリスト教は多くの宗教の中の一つの宗教であると、現代の殆どのキリスト者たちは考えるようになりました。しかし、それは聖書の主張とは全く異なっています。

v.8 「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。“わたしはアルファであり、オメガである。(初めであり、終わりである。21:6)”」

神は、今年もこの王であるキリストの祭日のミサに集う全世界のキリスト者に、聖書の朗読を通して語っておられます。

### 3. ダニ

新約聖書における主イエスの称号としての「人の子」という用語の背景として、このダニエル書のテキストは重要です。終末の日の人の子の王権は、全世界を支配するものであって、永遠であります。神の国という新しい世の到来は、多くの王国の中の一つの王国の実現というようなものではありません。共存する多くの支配の中の一つの支配ではなくて、唯一の新しい世がこれまでのすべての歴史に代わって永遠に実現するのです。

そのような王であるキリストが、私たちのミサのただ中に来ておられます。今朝の集会祈願で、教会は祈りました。「全能永遠の神よ、あなたは天地万物の王であるキリストのうちに、すべてが一つに集められるようお定めになりました。造られたすべてのものが、罪の束縛から開放されてあなたに仕え、栄光を終わりにくたたえることができますように。」現代人の心を支配する世俗化と相対化という思想に反抗して敢えて語られる、「王であるキリストの祭日のメッセージ」に、教会は今年も耳を傾けているのです。

アーメン、ハレルヤ。



## 11月30日 待降節第1主日

エシ 33:14~16 Iテサ 3:12~4:2 ルカ 21:25-28,34-36

### 1. ルカ

vv.27-28 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

典礼暦の新しい一年が、今日から始まります。その日には、来たり給うキリストを歓呼して迎えることになる神の国の民であることを、代々の教会はこの期節に特別に覚えて、待降節の典礼をささげて来ました。

洗礼の秘跡によってキリストの救いに与かっている人々と、そうでない人々との区別は、その日が来るまで外見上は見分けが付きません。それは神のキリストにおける特別な恵み(ロマ3:24)に関わる事柄であって、人間の側の功績や、生まれながらの人格の尊厳などとは別のものだからです。ルネッサンス以来の人文主義は、人間の人格や教養の価値を強調することによって、命の尊さという普遍的な価値を人々に教えて来ました。しかしやがてキリスト教の急速な世俗化と相まって、それがキリストの救いとは別の独立した価値として理解されるようになると、新約聖書が語るキリストの再臨と終末の裁きの使信は、次第に人々の関心から遠ざかってしまったのでした。

教会の中の大部分の信者たちが福音の終末的使信を忘れてしまった19世紀や20世紀という時代においても、しかし待降節の主日のミサの聖書朗読は、頑に伝統にしたがって、福音の終末的使信を会衆に語り続けて来たということを回想するとき、私たちは驚きを禁じ得ません。なぜなら教会は、その日には来たり給うキリストを歓呼して迎えることになる神の国の民以外の何ものでもないからです。

vv.35-36 「その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

その日には人はすべて、キリストを信じてその救いを受けているか否かが問われることとなります。

### 2. Iテサ

共にキリストの裁きの座の前に立つ民として、お互いに神に喜ばれる者となるために助け合い愛し合うということを、新約聖書は主に起源する命令として繰り返し教えています。「神に喜ばれるためにどのように歩むべきか」(v.1)を、私たちは新約聖書を通して知ることが出来ます。それはキリストの福音を拠り所として生きることであって、使徒たちが伝えた宣教の内容そのものなのです。

第二バチカン公会議は、「神の啓示に関する教義憲章」という公文書で聖書の重要性を強調して、すべての信者が自ら聖書を学ぶことを強く勧めました。そこでは有名な聖ヒエロニムスの「実際、聖書を知らないことは、キリストを知らないことである」という言葉が引用されて、信者は喜んで聖書に親しまなければならないと述べられています。

過去において、カトリック信者の大部分が聖書を殆ど全く知らない時代が、永く続いて来ました。しかし聖書を通して使徒たちは証言し、神は現代の信者に語りかけておられます。

v.13 「そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるように。アーメン。」

### 3. エレ

私たちは神の約束された天のエルサレムである神の国の到来の日に希望を置いています。この希望は初めイスラエルの家とユダの家に約束されていたものですが、今やキリスト・イエスにおいて、私たち異邦人も彼らと一緒にそれを受け継ぐ者とされました(エフェ2:11-13,3:6)。「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。」(ロマ8:24)

教会がその偉大な歴史的遺産として大切にされて来た典礼暦の、新しい一年が今年も待降節から始まりました。                      アーメン、ハレルヤ。